

大阪・大坂城下町跡

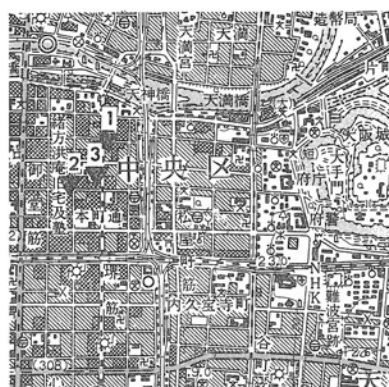
1 所在地 一 大阪市中央区道修町一丁目、二 同区瓦町二丁目、三 同区瓦町二丁目

2 調査期間 一 一九九二年(平4)九月～一九九三年二月
二 一九九二年一月～一九九三年二月
三 一九九三年二月～四月

3 発掘機関 財大阪市文化財協会

4 発掘担当者 一 森 毅・豆谷浩之、二 積山 洋、
三 南 秀雄

5 遺跡の種類 近世城下町跡



(大阪東北部)

6 遺跡の年代 桃山時代
～江戸時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

大坂・船場は、慶長三年(二五九八)の大坂城三の丸普請を契機に城下町としての整備が進められた地域である。近年この地域での発

掘調査が進展しつつある。今回は、一九九二年度に行なわれた調査で出土した木簡について紹介する。

一 OJ九二―一八次調査

調査地は堺筋と道修町通りの交差点の東南角である。本調査では、城下町の開発期から一八世紀初めに至るまでの町屋の変遷が確認された。木簡の出土点数は合計二七点である。このうち二六点は、南北に並ぶ一七世紀初めのゴミ穴二カ所から出土した。これらの遺構からは陶磁器類のほか多量の魚の骨が出土し、約二〇尾分のタイの骨がほとんど解体されない状態で見つかった。

ゴミ穴が埋められたあと、上層には敷地境の南北溝が作られた。木簡の残り一点はこの溝の周囲の整地層から出土した。一七世紀前半と考えられる。

二 OJ九二―二四次調査

調査地は御堂筋と堺筋の中間に位置している。船場の北部にあたるが、豊臣期の中心的な場所からは、やや離れている。今回の出土資料は将棋の駒一点である。大坂の陣後の江戸時代初期に属し、一七世紀中頃を下限とする整地層から多量の陶磁器類とともに出土している。

三 OJ九二―三三三三調査

調査地は瓦町通りを堺筋から西へ入った所である。一七世紀初めから一八世紀初めの間、ここは間口一間半から二間の狭い敷地に分

かれていたと推定され、少なくとも五時期の建物群が確認された。

墨書のある板二点は一七世紀中頃から後半の整地層から出土したもので、出土位置はゴミ穴などが設けられていた屋敷地の奥である。

この整地層で埋められた段階の屋敷地では、雑多な種類の小さな銅・真鍮製品や銅板の切り屑、何かを蒸焼きにしたと推測される俵形土製品などが多量に出土したが、これらの用途はよくわからない。

8 木簡の釈文・内容

一 OJ九二一八次調査

欠損等により判読困難なもの、内容不明のものが多いため、ここでは墨書の明瞭なもののみ紹介する。

- | | |
|-----|--|
| (1) | ・「目印」し□きの
久
大むろ百入 ひろせ」
152×25×4 033 |
| (2) | ・「目印」
大塚村 三郎□
(135)×21×3 039 |
| (3) | ・「目印」
又右衛門」
百さし入」
141×19×5 032 |
| (4) | 「合」
30×15×1 021 |



(1)
OJ92-24次



(4)

OJ92-18次出土の
矢羽根状文様の木製品



(3)



(2)



(1)

OJ92-18次調査出土木簡

(1) (3)はいずれも上端に切り込みのある荷札木簡である。これらのほかにも「あち」「むろ」など魚名の読み取れる木簡が数点含まれており、近辺に存在したとみられる魚市場との関連が想定される。(4)は用途未詳であるが、形状からみて将棋などの駒、あるいはまじない札の一種かと思われる。同形態のものももう一点出土している。他に、一端を削って細く尖らせ、矢羽根状の文様を施した用途未詳の木製品がある(長さ一五七mm幅一六mm厚さ三mm)。矢を模した形代の可能性がある。

二 OJ九二―二四次調査

(1) 「王将」

33×28×9 061

かなり傷みが激しく墨書も部分的にしか残っていない。しかし、墨痕からみて「王将」であると判断される。

三 OJ九二―三三三三調査

(1) 「百〇升」

(305)×27×5 019

(2) 「〇五大力」

(129)×42×6 019

(2)は五大力「菩薩」などと字句が続いていたと推定される。魔除けのための札で、上端の孔によって所定の場所に打ち付けたものであろう。

9 関係文献

森 毅・豆谷浩之「船場商人の屋敷跡」(勸大阪市文化財協会『葦火』四二一九九三年)

(一) 森 毅・豆谷浩之、二 積山 洋
(三) 南 秀雄、釈文 鳥居信子・豆谷浩之



(2)

OJ92-33次
出土木簡



(1)